九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本における元稹研究

長谷川，真史
九州大学大学院人文科学研究院 ： 専門研究員

https://doi.org/10.15017/1498245

出版情報：中国文学論集. 43, pp.115-124, 2014-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

日本における元稹研究

長谷川　真史

一　元稹研究の基礎資料

中唐の詩人元稹（字は微之、七七九～八三一）は従来杜甫（字は子美、七一二～七七〇）や白居易（字は楽天、七七二～八四六）といった唐代を代表する詩人に関する研究の中で、彼らを相対化する周辺人物として考察対象とされたに過ぎなかった。しかし、元稹は当時の詩名を以て「元才子」と称され、また白居易と共に「元白」と併称されるなど、中唐における文学的功績は決して白居易に劣るものではない。また、元稹が杜甫の詩集をいちはやく発見し、これを極めて高く評価した「杜甫の発見者」としての功績も無視できるものではない。このほか、李白や李賀、韓愈といった唐代を代表する詩人たちの創作理論を自らの文学創作に取り込んでいった特異な存在であると言える。しかし、残念なことに、唐代においてこれ程までに異彩を放つ元稹という詩人について、これまでに十分な研究成果が得られているとは言い難い。

我が国における元稹研究の基礎は花房英樹、前川幸雄著『元稹研究』（彙文堂書店、一九七七年）によって打ち立てられた。本書は花房氏の『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店、一九六〇年）に続く成果であるものの、白居易の周辺としてではなく、元稹自身に焦点を当てた専著として非常に貴重である。両氏は本書においてまず元稹の出自を古く北魏にまで遡り、元稹に至るまでの世系と彼自身の出自に対する自負とについて指摘し、年譜を新たに整理している（第一部「生涯と制作」）。また、本書では元稹の詩文集版本の伝存状況を整理し、文集の再構成を試み

ている（第二部「作品綜合研究」）。ここでは前掲の『白氏文集の批判的研究』と同様に、元稹の詩文の編次と制作時期を整理して作品番号を付し、後の研究に多大なる便宜をもたらした。これらの基礎的研究によって元稹研究は大きく進展する素地を得たものの、本書は我が国において唯一の元稹研究の専著であり、今日に至るまで本書に続く研究著書は発表されていない。

なお、大陸での研究状況については周相録「中国における元稹研究の回顧と展望」（『白居易研究年報』第八号、二〇〇七年）に詳細にまとめられている。周氏は元稹研究を「唐代文学研究の弱点である」と指摘したうえで、別集の整理の遅れや元稹研究の各分野における研究の不均衡を問題点として挙げている。特に元稹の事蹟に関する研究や「鶯鶯伝」研究は目覚ましい進歩を遂げている一方で、元稹の文学創作の位置付けや元稹の評価に関する研究は著しく不足しており、これらの研究分野を早急に推し進める必要があると説く。その一方、許総著、加藤国安訳『杜甫論の新構想――受容史の視座から』（研文出版、一九九六年）第一章「唐代における杜詩論」において「杜甫の発見者」としての元稹の位置付けが改めて検討されるなど、杜甫研究の視点から元稹の中国文学史上における役割を問い直す動きも見られる。

また、中国における元稹研究の基礎は陳寅恪『元白詩箋証稿』（上海古籍出版社、一九七八年、初版一九五〇年）に収録される元稹の作品に関する一連の論文によって拓かれた。すなわち、陳氏が一九三〇年代から四〇年代にかけて著述した第三章「連昌宮詞」第四章「艶詩及悼亡詩（附読鶯鶯伝）」第六章「古題楽府」である。これらは主に作品の成立時期、社会背景や元稹自身の事蹟に関する議論が中心となる。また、元稹の事蹟については卞孝萱『元稹年譜』（斉魯書社、一九八〇年）の功績が大きい。しかし一方で、これらの業績には再検討の余地も少なくなく、その後数十年間に及び議論の対象とされてきた。周氏は元稹の事蹟について文献資料から改めて考証を加え、『元稹年譜新編』（上海古籍出版社、二〇〇四年）を刊行しており、高い成果を挙げている。

元稹の詩文集の校訂本としては冀勤『元稹集』（中華書局、一九八二年初版）が長く定本として通行していたものの、過誤遺漏が多く、のちに是正されている。これを受けて本書は二〇一〇年に同局から修訂本が出版されており、元稹の詩文を扱う際の基礎資料とされている。また、編年校注本として楊軍『元稹集編年箋注（詩歌巻）』（三秦出

版社、二〇〇二年初版）は卞氏の考証をもとに編年し、校勘、注釈、集評を加えたもので、元稹研究に資する所の大きい基礎資料となった。しかし、卞氏の考証に基づく編年には異論が多く、また校勘や注釈が大幅に見直されることになる。なお、楊氏は引き続き『元稹集編年箋注（文章巻）』（三秦出版社、二〇〇八年）を刊行している。これらを受けて周氏は改めて作品の制作年代について再検証を行い、改めて校勘、注釈を加えて、『元稹集校注』（上海古籍出版社、二〇一一年）を刊行している。

以上に掲げた基礎資料により、元稹研究の基盤は十分に固まったと言える。しかし、その一方でこれらを土台とした新たな元稹研究の展開は見られない。そこで、本稿ではまずこれまでの元稹研究の状況を以下の四項目に分類して整理する。すなわち、「（一）杜甫の発見者としての位置付け」「（二）元白唱和詩を中心とした作品論」「（三）唐代伝奇「鶯鶯伝」に関する論考」「（四）平安朝文学への影響に関する研究」、以上の項目から、日本における元稹研究の現在に至るまでの研究状況を概括し[1]、現状において不足している点や再検討を要する問題点を指摘したい。

二　これまでの日本における元稹研究の現状

（一）杜甫の発見者としての位置付け

黒川洋一「中唐より北宋末に至る杜甫の発見について」（『四天王寺女子大学紀要』第三号、一九七〇年。のち『杜甫研究』所収、創文社、一九七七年）は、元稹を杜甫の発見者に位置付けた論考として、元稹研究においても重要な論著と言える。黒川氏は元稹に先んじて樊晃が杜詩を入手し、その詩文集を編んだと考証するものの、中唐において杜甫詩を高く評価し、これを継承した詩人として元稹、白居易、韓愈を挙げ、中でも元稹が杜甫の発見者として重要な位置を占めていることを指摘している。このほか、前川幸雄「元稹の杜甫観」（『国学院雑誌』第九十七号、一九九六年）では杜甫を通して元稹の位置付けを見直しているという点で独自性がある。しかし、近年、元稹研究の視点から杜甫と関連付けた論考は見られない。

（二）元白唱和詩を中心とした作品論

元稹の作品に関する論考は艶詩、悼亡詩、白居易との唱和詩を中心として多岐に渉る。前川、花房両氏によって基礎的研究が整備される以前では、星川清孝「白楽天の「琵琶行」と元微之の「琵琶歌」」（『茨城大学文理学部紀要（人文科学）』第七号、一九五七年）、山本和義「元稹の艶詩及び悼亡詩について」（京都大学『中国文学報』第九冊、一九五八年）が最も初期の論著として挙げられる。星川氏は元白の楽府作品について音楽描写の観点から考察している。山本氏は元稹の艶詩、悼亡詩が制作された背景を彼の家庭環境と恋愛生活から考察している。いずれの観点も以後の元稹研究の中核となる研究素材である。また、高橋美千子「元稹の夢についての考察」（京都大学『中国文学報』第三十二冊、一九八〇年）では、元稹の夢を題材とした長篇詩を考察対象として艶詩や悼亡詩、「鶯鶯伝」との関わりを指摘している。

近年では、従来の説をもとに新たな展開が見られる。艶詩については、諸田龍美「中唐における艶詩の流行と女性――元白の艶詩を中心として」（九州大学中国文学会『中国文学論集』第二十四号、一九九五年、のち『白居易恋情文学論』所収、勉誠出版、二〇一一年）、悼亡詩については陳翀「友の妻に代わって詩を賦す白居易――元稹の妻韋叢の死とその悼亡唱和詩」（『日本中国学会報』第五十九集、二〇〇七年。のち『白居易の文学と白氏文集の成立』所収、勉誠出版、二〇一一年）で新たな見解が示されている。諸田氏は、中唐における艶詩の流行や「鶯鶯伝」の成立の背景として当時の士大夫に要請されていた作詩能力と女性の役割の増大という社会的背景から考察し、対等な個人であることを前提とした「恋情」の存在を指摘している。また、陳翀氏は、悼亡詩という様式が元稹によって賦や祭文、伝奇等の様々な文学形態へと展開されていく過程を緻密に考証している。

元白の詩作に見える音楽描写については、中純子『詩人と音楽――記録された唐代の音』（知泉書館、二〇〇八年）に包括的な論考が見られるほか、論文としては中木愛「元白の音楽描写とその相関関係――中唐における音楽描写の盛り上がり」（『中国中世文学研究』第五十一号、二〇〇七年）が挙げられる。また、元稹の左遷中の唱和詩について、好川聡「元稹の異文化認識――白居易との応酬を中心に」（京都大学『中国文学報』第六十七冊、二〇〇八年）では、南方の風俗や風土を歌った長篇詩を考察し、元稹の詩人像を捉えなおそうとする試みも見られる。

このほか、艶詩、悼亡詩、元白唱和詩に関する論著を以下に掲げる。

入谷　仙介「悼亡詩について」（『入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集』一九七四年、のち『詩人の視線と聴覚』所収、研文出版、二〇一一年）

前川　幸雄「知的遊戯の文学――元・白唱和詩の種々相」（『中国文学の世界』第五号、中国古典研究会、笠間書院、一九八一年）

坂野　学「元稹「夢井」詩試論」（『函館大学論究』第二十号、一九八八年）

橘　英範「唱和から因継へ――元白唱和詩の変化」（『古田敬一教授頌寿記念中国学論集』汲古書院、一九九七年）

姜　若冰「贈内詩の流れと元稹」（『中国学会報』第五十九冊、一九九九年）

赤井　益久「元稹の政治と文学」（『中国読書人の政治と文学』創文社、二〇〇二年）

秋谷　幸治「元稹「聞白楽天左降江州司馬」詩の解釈をめぐって――詩人の情の表現のされ方について」（『人文科学』第十二号、大東文化大学人文科学研究所、二〇〇七年）

山崎　藍「元稹「夢井」新釈――中国古代における井戸観の一側面」（『東方学』第一一六号、二〇〇八年）

山崎　藍「死者を悼んで旋回する――元稹「夢井」における「遶井」の意味」（『東方学』第一二三号、二〇一二年）

諸田　龍美「元稹との永訣――白居易「微之を祭る文」をめぐって」（『中国文史論叢』第八号、二〇一二年）

以上に掲げた論著は白居易との交友を中心として、艶詩や悼亡詩といった女性的な作品を数多く生み出した、いわば流行作家としての側面から元稹を捉えようと試みたものであった。これに対して、近年は当時の社会政治の状況を背景として制作された作品群に対する研究、すなわち、諷諭詩という観点からの研究も見られる。

元稹、白居易、李紳らの新題楽府唱和をめぐる問題については、静永健「元稹「和李校書新題楽府十二首」の創

作意図」（『日本中国学会報』第四十三集、一九九一年）、及び『白居易「諷諭詩」の研究』（勉誠出版、二〇〇〇年）に新見地が拓かれた。元稹の楽府創作を中心とした文学理論を扱った研究としては、赤井益久『中唐詩壇の研究』（創文社、二〇〇四年）第Ⅲ部第一章「中唐詩壇諷諭詩の系譜」（初出『国学院大学大学紀要（文学研究科）』第十二号、一九九六年）、及び同第三章「元稹の文学理念――元和五年を中心に」（初出『漢文学会報』第三十六・三十七号、一九九〇―一九九一）は元白の新題楽府の成立背景について、諷諭を旨とする彼らの楽府創作の理念から考察している。

また、市川桃子「元稹「四皓廟」――中唐詩の批判精神」（伊藤漱平編『中国の古典文学――作品選読』東京大学出版会、一九八一年）は、元稹が独自に展開した商山四皓批判が杜甫の影響によるものであったことを指摘しつつ、所謂「新楽府運動」や「古文運動」が展開された中唐詩壇の潮流の中で従来の伝統的な四皓像を覆そうとする批判精神が生まれたと述べている。

（三）唐代伝奇「鶯鶯伝」に関する論考

元稹が制作した唐代伝奇「鶯鶯伝」に関する研究は元稹研究の中でも特に関心が集まる研究領域である。日本における「鶯鶯伝」研究は、近藤春雄「唐の才子佳人小説について――李娃伝・鶯鶯伝・霍小玉伝」（『愛知県立大学説林』第十六号、一九六八年）、柳瀬喜代志「「復古」の詩と長恨歌伝・鶯鶯伝に見える楊貴妃の像」（『早稲田大学教育学部学術研究（国語・国文学編）』第二十三号、一九七四年）などの論文を始めとして徐々に研究成果が蓄積されていった。

その後、とりわけ一九九〇年代に盛んに研究成果が発表されている。内山知也「鶯鶯伝の構造と主題について」（『日本中国学会報』第四十二集、一九九〇年）が嚆矢となり、富永一登「唐代における愛情小説の限界――「鶯鶯伝」についての私見」（『中国文化論叢』第三号、一九九四年。のち『中国古小説の展開』所収、研文出版、二〇一三年）、小南一郎「元白文学集団の小説創作――鶯鶯伝を中心にして」（『日本中国学会報』第四十七集、一九九五年。のち『唐代伝奇小説論――悲しみと憧れと』所収、岩波書店、二〇一四年）、諸田龍美「「欧陽詹」事件から見

た「鶯鶯伝」の新解釈――中唐の「尤物論」を巡って」（『日本中国学会報』第四十九集、一九九七年）と新見解が矢継早に発表されており、盛んに研究が重ねられてきた。

二〇〇〇年以降になると議論はやや下火になるものの、下定雅弘「「鶯鶯伝」をどう読むか？――「情の賦」との関連を中心に」（『岡山大学文学部紀要』第五十号、二〇〇八年）が発表されており、今なお関心の高い研究分野であることが窺われる。このほか、「鶯鶯伝」に関する論著を以下に掲げる。

芝田　和臣「鶯鶯伝――唐代小説の一断面」（『中国の歴史と文化』第一号、一九五九年）
内田泉之助「「待月西廂下」の詩について――その源流と展開」（『二松学舎大学論集』第四十一号、一九六六年）
斎藤喜代子「「憐取眼前人」考」（『城南漢学』第十号、一九六八年）
西岡　晴彦「鶯鶯伝――中国恋愛小説の原型」（伊藤漱平『中国の古典文学――作品選読』東京大学出版会、一九八一年）
松崎　治之「唐代伝奇に見られる愛の世界――「鶯鶯伝」についての一考察」（『筑紫女学園短期大学紀要』第十九号、一九八四年）
西岡　晴彦「唐代伝奇小説――《鶯鶯伝》の多様な解釈――《離別の歌》の読み方を中心に」（『鎌田正博士八十寿記念漢文学論集』大修館書店、一九九一年）
張　　兢「唐代小説と恋の成就――「鶯鶯伝」の恋をめぐって」（『竹田晃先生退官記念東アジア文化論叢』汲古書院、一九九一年）
尾崎　保子「「秋香亭記」と「鶯鶯伝」小考――男性像と女性像の比較から」（『学苑』六百九十号、一九九七年）
小松　武男「『候鯖録』所収「鶯鶯伝」本文について」（『文芸言語研究（文芸篇）』第三十四号、一九九八年）
若林　健志「「鶯鶯伝」の言語について」（『東洋大学紀要（教養課程篇）』第三十七号、一九九八年）
小松　武男「『類説』所収「鶯鶯伝」本文について」（『文芸言語研究（文芸篇）』第三十六号、一九九九年）
黒田真美子『唐代古典小説選5　枕中記・李娃伝・鶯鶯伝他（唐代Ⅱ）』（明治書院、二〇〇六年）

（四）平安朝文学への影響に関する研究

元白唱和詩は我が国に将来され、彼らの交友関係や唱和された詩文は平安朝の知識人の文脈の中に取り込まれて行くことになる。唐詩の名句集『千載佳句』や句題和歌集『和漢朗詠集』に彼らの詩が採録され、その半数以上の割合を占めるに至っている。平安朝文学における元白唱和詩の受容に関する研究はかなり早くから展開が見られる。金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集――句題和歌・千載佳句研究篇』（芸林社、一九五五年初版、一九七七年復版）は『千載佳句』をもとに全唐詩中の元稹詩の遺漏を整理するなど、基礎的研究として資料価値が高い。

また、近年は「鶯鶯伝」と平安朝物語文学との関連を考察する動きが見られる。例えば、諸田龍美「〈もののあはれ〉の淵源――「若紫」の密通と「鶯鶯伝」」（『和漢比較文学』第四十号、二〇〇八年）、新間一美「源氏物語花宴巻と「鶯鶯伝」――朧月の系譜」（『白居易研究年報』第九号、二〇〇八年）など、『源氏物語』を中心とした物語文学との比較研究が試みられており、さらなる展開が期待される分野である。このほか、平安朝文学と元稹の文学に関する論著を以下に掲げる。

久保田孝夫「『松浦宮物語』と「鶯鶯伝」」（『同志社国文学』四十二号、一九九五年）
郭　潔梅「「元白詩筆」と『源氏物語』――桐壺巻にみえる帝の思念をめぐって」（『中国文化研究』第十九号、二〇〇二年）
丁　莉「『伊勢物語』「狩の使」の達成――『鶯鶯伝』を土台にして」（『人間文化論叢』第七号、二〇〇四年）
神田龍之介「『伊勢物語』第六十九段試論――唐代伝奇「鶯々伝」との比較を中心に」（『国語と国文学』第八十三号、二〇〇六年）
森田　直美「桐壺更衣という呼称――元白唱和における「紫桐花」の受容を中心に」（『国文目白』第四十五号、二〇〇六年）
新間　一美「源氏物語の春秋争いと元白・劉白詩」（『国語と国文学』第八十四号、二〇〇七年）

三　元稹研究の現状と今後の問題点

以上に概観してきた日中の元稹研究の現状を総括すると、日中両国とも「鶯鶯伝」に関する研究成果は豊富に得られているものの、「鶯鶯伝」研究が独立した研究分野として先行している傾向がある。これは元稹の事蹟、とくに女性との恋愛生活に関する研究と結びついて元稹の風流な「才子」としての人物像を捉えるにとどまり、元稹自身の生涯に亘る文学創作活動と有機的に結びついていない。

中国においては陳寅恪の論説が基幹となって、元稹の政治的立場や主張、当時の社会状況と結び付いた考証が主導的である。すなわち、元稹の事蹟から政治家としての元稹を捉えようとする議論が大きな成果を挙げていると言える。しかし、元稹の文学創作の理念や理論、そして、文学作品そのものに対する考察は十分な効果を挙げているとは言い難い。

日本においては白居易との交友や唱和詩を中心とした艶詩や悼亡詩の研究成果が盛んに発表されており、流行作家としての「元白」両名の位置付けとその影響を裏付けるものであると言える。その一方で、楽府を中心とした元稹の文学創作理論に関する論考は少ない。また、元稹の「杜甫の発見者」として位置付けを再確認しようとする動きは見られるものの、これを元稹の文学理念と関連付ける議論は不足している。

「杜甫の発見者」としての側面は、元稹の文学創作の理論形成において極めて重要な役割を果たしている。杜詩との邂逅は、いわば元稹の文学創作の原点と言える。また、元稹は杜甫を崇拝し、その詩文を高く評価しつつも、これを継承し超克しようとする自負を備えており、中国文学史上における杜詩の展開という点において再検討される必要がある。杜詩、とりわけ五言長篇詩が元稹にもたらした影響は、一百韻詩をはじめとした元白唱和詩や「鶯鶯伝」中の「会真詩」といった長篇詩と有機的に結び付くものである。加えて、こうした長篇詩や「鶯鶯伝」の物語

性は、のちの元稹の楽府創作へと展開していく基盤となったと考えられる。また、虚構の物語の中に現実への訓戒を求めるという元稹の楽府の特色は、「哀江頭」や「兵車行」といった杜甫の社会批判詩に根差すものである。そして、物語性と社会批判という二つの要素は、杜甫から元稹への継承関係のみならず、宋元時代以降の社会批判文学へと展開し、『水滸伝』などの戯曲小説を生み出す基盤ともなったと考えられるのである。

元稹の中国文学史上における位置付けの大きさに反して、大陸と同じく日本における元稹研究もまた十分な成果が得られているとは言い難い。その基盤は文献資料という点では十分に用意されていると言える。しかしその一方で、花房氏論著以来、元稹研究の専著は発表されていない。また、元稹の詩文の日本語訳注は未だ存在していない。今後の元稹研究の発展のためには、まずこうした日本語の訳注が最も必要とされるであろう。

注

（1）元稹研究に関する論著をまとめるにあたり、『東洋学文献類目』（京都大学人文科学研究所附属東洋文献学センター、一九五五年～一九八九年）、石川梅次郎『中国文学古典研究文献要覧　一九四五～一九七七（戦後篇）』（日外アソシエーツ、一九七九年）、川合康三『中国文学古典研究文献要覧　一九七八～二〇〇七（古典文学）』（日外アソシエーツ、二〇〇八年）を参照した。